

名大醫學部學友時報 2023 8

目次	
1. 学友会評議会開催	(2)
2. 名古屋大学医学部学友会	名古屋支部総会のお知らせ
3. 准教授就任	服部 祐季 (3) 結城 賢弥 (4)
4. 新院長に聞く	梶田 泰一 (5) 北川 喜己 (6) 志水 清和 (7) 野崎 裕広 (8)
5. 海外留学体験記	前田 啓子 (9)
6. コーヒーブレイクタイム	石川 清 (10)
7. 読書ノススメ	村松 秀城 (11)
8. 学友大会ご案内	(12)
9. 第32回基礎医学セミナー研究発表会 授賞式	
10. 基礎医学セミナー最優秀受賞者の言葉	(13)
11. 刑務所で出会った人たち	渡辺 久雄 (15)
12. 令和4年度・令和5年度学友会年会費ご請求につきまして	(16)
13. 住所変更・勤務先変更のご提出のお願い	
14. お詫びと訂正	
15. 編集後記	

学友会評議会開催



学友会評議会開催

7月1日(土)医学部鶴友会館2階大会議室において、令和5年学友会評議会が41名(出席者20名、リモート21名)の出席と43名の委任状を得て開催されました。はじめに、会計部長の大野欽司先生が開会の辞を述べられ、名古屋支部の佐野由衣先生が議長、時報部長の梶山広明先生が副議長に選出されました。続いて、学友会会長の木村宏研究科長、学友会副会長の宇野岳人先生、小寺泰弘病院長がご挨拶され、抱負を述べられました。次に、この一年間にご逝去された64名の会員に対して黙祷が捧げられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。その後、新評議員が紹介されました。新しく評議員になられたのは支部1名、本部7名の計8名、以下の方々です。大垣地方支部の進藤丈先生(名大S58卒)、病態内科学講座呼吸器内科学分野教授の石井誠先生(慶應義塾大学H8卒)、病態外科学講座血管外科学分野教授の坂野比呂志先生(名大H8卒)、病態外科学講座心臓外科学分野教授の六鹿雅登先生(名大H8卒)、発育・加齢医学講座地域在宅医療学・老年科学分野教授の梅垣宏行先生(名大H2卒)、運動・形態外科学講座人間拡張・手の外科学分野教授の山本美知郎先生(旭川医科大学H10卒)、脳神経病態制御学講座精神医学分野教授の池田匡史先生(名大H11卒)、病態外科学講座泌尿器科学分野教授の赤松秀輔先生(京大H13卒)。

続いて議事に入りました。はじめに庶務部長の西口康二先生より会務報告が行われ、令和4年度の第113回学友大会について報告されました。また今年度の第114回学友大会につきまして、病体内科学講座糖尿病・内分泌内科学分野教授である有馬寛先生を大会委員長とし、令和5年11月11日(土)名古屋観光ホテル3階那古の間にて開催され、記念講演として、カリフォルニア工科大学フレッド・カブリ冠教授・東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構機構長である大栗博司先生による「9次元から来た男とは何者か」が行われることが述べられました。また、昨年度の支部総会については5支部で開催され、6名の教授が出席されたことが報告されました。次に、会計部長の大野欽司先生から令和4年度の収支決算を報告され、監事の今釜史郎先生による監査も報告されました。また併せて令和5年度の予算についても承認されました。名誉会員には退職された1名の教授、門松健治先生(生物化学講座分子生物学)、また支部長歴10年(70歳以上)は該当者なし、大会委員長歴(70歳以上)は河野弘先生(第109回)ということで承認されました。その後、大野欽司先生より学友会名簿のクラス会並びに支部会との共有につきましてお話があり、議論がなされました。最後に佐野由衣先生が開会の辞を述べられ、本年度の評議会は終了しました。

(文責:下川 浩希)

名古屋大学医学部学友会 名古屋支部総会のお知らせ

下誌の通り令和5年度名古屋支部総会を開催します。是非ご出席の程お願い申し上げます。

日時: 令和5年10月28日(土) 午後2時00分~

場所: 名古屋大学医学部鶴友会館2階大会議室

1. 総会: 午後2時00分~

2. 講演: 午後2時30分~

講師

梅垣 宏行先生

名古屋大学大学院医学系研究科 発育・加齢医学講座

地域在宅医療学・老年科学分野 教授

演題

『健康寿命延伸のための

フレイル・サルコペニア予防』

名古屋支部長 宇野岳人

〒466-8550

名古屋市昭和区鶴舞町65

名古屋大学医学部学友会

TEL: 052-744-2512

※準備の都合上、ご出席の有無を10月19日(木)までにご返信下さい

注記: コロナ感染症の情報により変更があるかもしれませんので、ご了承ください。

准教授就任

機能形態学講座 細胞生物学分野 准教授

はっ どり
服部 祐季

〈経歴〉

平成22年3月 京都大学医学部保健学科検査技術科学専攻 修了
平成24年3月 京都大学大学院生命科学研究所高次生命科学専攻
修士課程 修了
平成24年4月 日本学術振興会特別研究員DC1
平成27年3月 京都大学大学院生命科学研究所高次生命科学専攻
博士後期課程 修了(博士:生命科学)
平成27年4月 名古屋大学大学院医学系研究科細胞生物学分野 特任助教
平成28年4月 日本学術振興会特別研究員PD
令和1年7月 名古屋大学大学院医学系研究科細胞生物学分野 特任助教
令和4年6月 名古屋大学大学院医学系研究科細胞生物学分野 講師
令和5年7月 名古屋大学大学院医学系研究科細胞生物学分野 准教授

〈業績〉

* Corresponding author

- Hattori Y*, Kato D, Murayama F, Koike S, Asai H, Yamasaki A, Naito Y, Kawaguchi A, Konishi H, Prinz M, Masuda T, Wake H, Miyata T. CD206+ macrophages transventricularly infiltrate the early embryonic cerebral wall to differentiate into microglia. *Cell Rep.*, 42 (2), 112092 (2023).
- Hattori Y*, Itoh H, Tsugawa Y, Nishida Y, Kurata K, Uemura A, Miyata T. Embryonic pericytes promote microglial homeostasis and their effects on neural progenitors in the developing cerebral cortex. *J. Neurosci.*, 42(3), 362-376 (2022).
- Hattori Y*, Naito Y, Tsugawa Y, Nonaka S, Wake H, Nagasawa T, Kawaguchi A, Miyata T*. Transient microglial absence assists postmigratory neurons in proper differentiation. *Nat. Commun.*, 11, 1631 (2020).
- Hattori Y*, Miyata T. Embryonic neocortical microglia express Toll-like receptor 9 and respond to plasmid DNA injected into the ventricle: technical considerations regarding microglial distribution in electroporated brain walls. *eNeuro*, 5 (6), ENEURO.0312-18.2018 (2018).
- Hattori Y*, Miyata T. Microglia extensively survey the developing cortex via the CXCL12/CXCR4 system to help neural progenitors to acquire differentiated properties. *Genes Cells*, 23 (10), 915-22 (2018).

学友会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、令和5年7月1日をもって、名古屋大学大学院医学系研究科細胞生物学分野の准教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

私は平成22年に京都大学医学部人間健康科学科検査技術科学専攻を卒業した後、同大学大学院生命科学研究所に進学し、杉田昌彦先生のもとで結核病態をモデルに脂質抗原に対する免疫応答の研究に従事しました。平成27年3月に学位を取得した後、同年4月より現所属先の名古屋大学大学院医学系研究科細胞生物学分野に特任助教として着任しました。これを機に免疫学から神経科学・脳発生学へと分野を横断いたしました。宮田卓樹教授の「一つ一つの細胞の動きを丁寧に観察し、その集

合体として形成される脳の発生現象を理解する」という研究姿勢に感銘を受けて研究室の門をたたき、今後の研究対象について相談させて頂くなかで、自身の興味と経験を最大限に活かすため、脳内の免疫細胞である“ミクログリア”の研究を開始することになりました。

研究について少しご紹介しますと、私は発生期のミクログリアが脳形成や脳機能発達にどのように寄与しているのかについて研究を進めて参りました。マウスにおいてミクログリアは胎生9日目から脳に定着し始めますが、興味深いことに、その後は発生進行に伴い大脳原基内での分布パターンを変化させます。つまり、ある特定の場所に偏って分布したり、ある場所からは一時的に不在となるなど非常に動的で、私はこの不思議な挙動に注目し、その分布変化メカニズムや生理学的意義について調べ、ミクログリアが自身の分布を制御しながら周囲の神経系細胞の成熟・機能をサポートしていることを明らかにしました。一方で、ミクログリアがもつ多様な機能・性質に着目し、ミクログリアがいかにして多様性を獲得するのかについても研究を進めています。その要因として、ミクログリアの脳定着ルート・時期の違い、あるいは、脳にたどりついてから周囲の環境に呼応して特定の性質を得る可能性を考慮し、そのような観点から検証を進めています。

近年、母体の過度な免疫活性化が、胎児の統合失調症、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症等の発症リスクを高めることが報告されています。今後は母体炎症時にミクログリアがいかに性質を変え、脳機能に影響を及ぼすのかを解明し、将来的に母体炎症に起因する脳発生異常の予防法や治療法の開発へと繋がるような展開を視野に研究を進めていきたいと考えております。

今後の研究者としての目標は、国内外の研究者との交流を深め国際的なネットワークを構築しながら、自身の視野を広げるために積極的に様々な機会に挑戦することです。そして、名古屋大学の研究推進力にも微力ながらも貢献できればと考えております。教育におきましては、引き続き学部学生向けの人体解剖学講義・実習と発生学講義、基礎医学セミナーの指導、大学院生向けの形態解剖学講義、ベーシックトレーニングを受け持ちます。授業を通じて教育者としての研鑽を積みながら、学生さんとの交流を大切に、同時に研究の楽しさも伝えていきたいです。

最後になりましたが、これまで沢山の方々からお力添えを頂きましたこと、この場をお借りして心より感謝申し上げます。これからも周りの皆様から頂く刺激や学びを大切にしながら、教育・研究活動に邁進していきたいと考えております。そして、活動を通じて社会に貢献できますよう尽力いたします。学友会の皆様には、今後共ご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

准教授就任

頭頸部・感覚器外科学講座
眼科学感覚器障害制御学分野 准教授ゆう き けん や
結城 賢弥

〈経歴〉

平成13年3月	慶應義塾大学医学部卒業
平成13年4月	慶應義塾大学医学部眼科学教室
平成14年4月	足利赤十字病院眼科
平成16年1月	国立病院機構栃木病院眼科
平成17年3月	慶應義塾大学医学部眼科学教室助教
平成20年4月	慶應義塾大学医学部大学院医学系研究科博士課程入学
平成24年3月	同上修了(医学博士)
平成24年4月	慶應義塾大学医学部眼科学教室特任助教
平成25年7月	ハーバード大学ポストン小児病院留学
平成27年8月	慶應義塾大学医学部眼科学教室専任講師
令和4年10月	名古屋大学大学院医学系研究科総合医学専攻 頭頸部・感覚器外科学 講師
令和5年7月	名古屋大学大学院医学系研究科総合医学専攻 頭頸部・感覚器外科学 准教授

〈業績〉

- 1) Yuki K, Ozawa Y, Yoshida T, Kurihara T, Hirasawa M, et al. Retinal Ganglion cell loss in superoxide dismutase 1 deficiency. Invest Ophthalmol Vis Sci. 2011; 52:4143-50.
- 2) Yuki K, Tsubota K. Increased Urinary 8-hydroxy-2'-deoxyguanosine (8-OHdG) /creatinine level is associated with the progression of normal tension glaucoma. Curr Eye Res. 2013; 38:983-8.
- 3) Yuki K, Asaoka R, Ono T, Awano-Tanabe S, Murata H, et al. Evaluation of fear of falling in Patients with Primary Open-Angle Glaucoma and the Importance of Inferior Visual Field Damage. Invest Ophthalmol Vis Sci. 2020; 61:52.
- 4) Yuki K, Tanabe S, Kouyama K, Fukagawa K, Uchino M, et al. The association between visual field defect severity and fear of falling in primary open-angle glaucoma. Invest Ophthalmol Vis Sci. 2013; 54:7739-45.
- 5) Yuki K, Shiba D, Kimura I, Ohtake Y, Tsubota K. Trabeculectomy with or without intraoperative sub-tenon injection of triamcinolone acetonide in treating secondary glaucoma. Am J Ophthalmol. 2009; 147:535-9.

学友会の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、2023年7月1日付をもちまして名古屋大学大学院医学系研究科眼科学感覚器障害制御学分野准教授を拜命いたしました。僭越ながら、自己紹介させていただきます。

私は2001年に慶應義塾大学医学部を卒業いたしました。その後、小口芳久教授の主宰する慶應義塾大学医学部眼科学教室に入局しております。2002年には足利赤十字病院、2003年には独立行政法人国立病院機構栃木病院に赴任いたしました。地方の病院には緑内障の患者がたくさんおり、自分の治療法がベストなのか悩む毎日でした。

2004年、眼科医4年目に当時の緑内障班チーフの大竹雄一郎講師にお招きいただき慶應義塾大学に帰室し、緑内障を専門

として臨床ならびに研究を開始いたしました。大竹雄一郎先生は、緑内障診療に関して様々なことを教えていただきました。残念ながらその後40代の若さで腫瘍によりお亡くなりになられてしまいました。大竹先生から学びましたことは、今でも心に染み付いております。

その後、2008年に慶應義塾大学医学部大学院に進学し、坪田一男教授(前慶應義塾大学医学部眼科学教室教授)石田晋先生(現北海道大学眼科学教室教授)、小沢洋子先生(現藤田医科大学教授)、岡野栄之先生(現慶應大生理学教室教授)の下で緑内障に関する基礎的な研究に従事いたしました。SOD1欠損マウスの加齢による網膜の変化にて学位を取得しております。岡野教授の元ではマウスiPS細胞から網膜神経節細胞の分化誘導の研究をさせていただきました。また同時に緑内障のリスク要因研究のために茨城県筑西市で国立がんセンター津金昌一郎先生、澤田典絵先生、大阪大学磯博康教授、筑波大学山岸良匡教授のご指導のもと次世代多目的コホート研究に参加させていただきました。

大学院修了後は、ハーバード大学ポストン小児病院神経科学Larry Benowitz教授のもとに留学いたしました。Larry教授の下では、PhDの先生方と、一酸化窒素による視神経軸索再生制御を研究いたしました。一酸化窒素を投与すると、驚くほどに軸索が再生し、そのシグナル制御の研究はとても楽しい思い出です。

帰国後は当時の慶應大眼科の坪田一男教授のご高配で講師とさせていただきます。帰国後は緑内障の臨床的な研究を行いました。特に緑内障患者における運転や転倒などのQOLに関する論文を複数書くことができました。これらの研究は、患者さんから私の眼でも車の運転をして良いのですかと聞かれたことをエビデンスを元にお答えしようとしたところほとんど論文がなかったため始めた研究になります。自分ではこのようにたくさん論文が出せると思っていたのですが、これも縁だなと思っております。

わたくしは専門を緑内障としております。緑内障は日本人の後失明原因の1位の疾患であり、かつ、70歳以上の有病率は10%と極めて高値であります。中部地方は網膜硝子体疾患を専門にされている先生が多く、愛知県には緑内障専門医は少ないとされています。私自身が名古屋の生まれ育ちであり、いつか名古屋で仕事をしたいと考えておりました。西口先生と縁あってお会いする機会があり、西口先生の、網膜色素変性という失明に至る治療方法がない眼疾患を治る病気にしたいという強いお気持ちに惚れて名古屋大学に異動いたしました。

名古屋大学眼科医局員ならびに中部地方の緑内障患者のために今後の人生を費やしたいと考えております。学友会の皆様には今後ともどうぞご支援何卒よろしくお願い申し上げます。

新院長
に
聞く

JCHO 可児とうのう病院

かじ た やす かず
梶田 泰一

当院は、1946年5月健康保険 土田病院として開設され、岐阜社会保険病院として長年住民の皆様にお世話されてきました。2014年4月より、地域医療の貢献を目指す独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）所属にともない、地域の皆様からわかりやすい可児とうのう病院に名前をあらためました。急性期病棟137床、地域包括ケア病棟53床の合計190床を持ち、内科、外科、整形外科、皮膚科、泌尿器科、脳神経外科、婦人科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科の診療科を有しています。

—— 病院長に就任された今のお気持ち

当院は、急性期医療のみならず、地域包括ケア病棟のほかに、附属介護老人保健施設や訪問看護ステーションを有し、地域包括ケアシステムの要の役を担っています。私は脳神経外科医として、手術に明け暮れてまいりました。介護・予防などの知識や経験はほとんどなく、新しい分野に挑戦する気持ちでした。また、名古屋を離れて深刻な地域の医師不足の問題にも直面しています。住民の皆様からは、市内唯一の公的病院として救急医療などの役割も期待され、医師の確保は必須です。そのほか多くの課題と向き合う緊張の毎日を過ごしています。

—— 病院の特徴

岐阜社会保険病院時代から病気の予防に役立つ検診センターや急性期医療に積極的に取り組んでまいりました。加えて、2015年、回復期病棟を設立し、介護老人保健施設や訪問看護ステーションとあわせて、慢性期医療や介護サービスがより充実したことにより、予防・医療・介護がシームレスに提供できる特徴があります。

可児市は、名古屋市および県庁所在地の岐阜市から30km圏内にあり、人口10万人をこえる名古屋市のベッドタウンです。ただ、地区によりましては高齢化もすみ幅広い世代の医療ニーズに応える必要があります。高齢者は軽度の病気でも入院を必要とすることも多く、身近に入院して治し支える医療機関（地域型病院）があると住民は安心します。地域型病院は、1) 外来および健診・予防から急性期・慢性期・在宅医療を行う地域密着型病院 2) 在宅医療を行わない地域一般病院 3) 急性期病院の後方支援病床を確保する地域連携病院に分類されます。当院は、今までの実績をふまえ、急性期医療にも対応する地域密着型病院の立ち位置で役割を果たしています。

—— 今後の展望や抱負

今後、少子高齢化にともなう疾病構造の変化や医療技術の進歩など医療を取り巻く環境は、ますます変わります。その激動に流されず、命を大切にする医の倫理を守り、患者さんのQOLを少しでも向上するために、質の高い医療を提供する努力を続けたいと思います。また、可児市には複数の地域型病院があります。地域型病院間でそれぞれの特徴をいかして上手く連携すると共に、患者さんやご家族が高度な専門的医療を望まれる場合には、速やかに適切な県立多治見病院や中部国際医療センターなどの高度医療機関を紹介するシステムづくりも進めてまいります。可児市がさらに魅力ある街になりますように、健康の正しい知識を学び、日々の生活習慣を見直しながら、また病気の早期発見にもつとめ、住民の皆様が生き活きと長く人生を楽しめる街づくりにも貢献したいと思っています。

—— 卒業研修への取り組み

研修医は採用できておりません。

—— 学生へのメッセージ

人生や生活の選択にコスパを重視することは大事です。一方、老子や荘子の道化思想が由来とされる「無用の用」という言葉もあります。大学を卒業し、臨床や研究の道に進みますと、生産性が求められます。豊富な時間に恵まれているのは学生の大事な特権だと思います。今は、あまり役にたたなさそうなことや意義がみつからないコスパの悪いことでも時間をかけて取り組んでいると、物事の本質に気づいたり、将来の道がみえてくるかもしれません。あわせて、高校教育までの受け身の学問から、大学時代には自分で問題意識をもち、自己評価を繰り返して自立する人間形成を始める心構えも養っていただきたいです。



新院長 に 聞 く

名古屋掖済会病院

きた がわ よし み
北川 喜己



2023年4月に病院長に就任された北川喜己先生にお話を伺いました。

—— 病院長に就任された今のお気持ち

色々な問題が多く苦勞している所もあります。コロナに関しては5類になりましたが、特に病院内での対応に大きな変化はなく主に救急においてコロナの患者さんとコロナ以外の患者さんの受け入れのバランスを考えていかなければなりません。また働き方改革についても取り組んでいます。勤務時間をタイムカードにより管理していますが、救急の夜間の対応や心臓外科などの長時間の手術を行う場合にはどうしても時間外の勤務が発生してしまう場合が多く、タスクシェアなどを行い問題解決に尽力しています。また勤務時間と医師の自己研鑽の時間との兼ね合いも考慮に入れなければなりません。このような時代の変化に対しても考え方をえつつ対応しなければならぬと思っています。

—— 病院の特徴

掖済会は明治時代に前島密さんが中心となり設立されました。当所は船の船員の福利厚生のために作られたものです。その名残もあり、掖済会病院は日本に8個ありますが全て港のある地域にあり、名古屋はその中で最大の規模です。名古屋では掖済会の施設として病院だけでなく、看護学校や埠頭診療所といった施設にも力を入れています。そして活動として歴史の名残として今でも船員の健診や洋上救急も行っており、海上保安庁との繋がりが強く、救命士の実習も行っているのがこの病院の特徴です。

また当院はドクターヘリの重症患者受入れなど救急が充実しています。先進医療に関しても、ダヴィンチなどのロボット手術や診断と治療が同時並行で行えるハイブリッドERも取り入れています。救急と先進医療の2つがこの病院の強みとなっています。

—— 今後の展望や抱負

救急と先進医療という強みに継続して力を入れつつ、歴史も継承していきたいと思っています。また新たな取り組みとして新しい外来棟を作り、手術室やICUを新しくしようと思っています。ヘリポートも新しく作りアクセスをさらに良くする事も考えています。さらに救急として名古屋市と海部地域を中心にドクターカーを始め準備をしており、今年中には稼働できると思っています。

ドクターカーでは病院に搬送されるまでの時間で止血などの処置を行う事で時間を争う緊急性の高い現場にも対応できると思います。過去には手術が間に合わなかったために患者さんが命を落としてしまう悲しい事例がありました。これにより助かる命を少しでも増やしたいと考えています。

—— 卒業研修への取り組み

当病院では研修を全国どこからでも歓迎しています。研修する上で2年間しっかり学習する事で救急対応や初期対応がしっかりできる医師になってほしいと思っています。当病院では救急をはじめ各科のローテート研修が充実しており2年間研修する事で怖い病気がなくなり、どんな患者さんでも診察できるようになると考えています。将来どんな科に行くとしても、内科的そして外科的知識を身につけ、子供からお年寄りまでどんな患者さんにも対応できる医師が理想的であり、それを目指してほしいと思っています。また雰囲気作りに関してもピリピリとした雰囲気ではなく、仲の良いアットホームな病院であり研修も楽しく行えると思います。

—— 学生へのメッセージ

学生時代には友達をたくさん作ることが大切だと思っています。僕自身が学生時代のサークルやポリクリ班での友達との交友関係が今でも続いており、非常に心強ク思っています。病院内だけでなく病院外にも繋がりがあると良いことが多くあるので、学生の皆さんには友達をたくさん作りその友達を大事にしてほしいと考えています。学生の間に友達とたくさん学習して、たくさん遊ぶことで一生の思い出を作りたいと思います。



新院長
に
聞く

一宮市立市民病院

しみず 志水
きよかず 清和

—— 病院長に就任された今のお気持ち

組織には最終的な責任を取る人間が必要です。それが私の役目だと考えています。職員にはすべての責任は私が取るので、臆することなく、真摯に仕事に向き合っただけで欲しいと思っています。私の仕事は、働きやすい環境を整え、職員を全力で応援することだと考えています。医療は素晴らしい仕事です。私自身は、この仕事に携われることに誇りと感謝を感じています。何よりもこの想いを後進に伝えていきたいと思っています。

—— 病院の特徴

当院は昭和11年に一宮市診療所として開設されました。昭和20年には戦火で全焼してしまいましたが、市の施設を利用し臨時診療を続けていたそうです。“どんな状況でも、地域医療のためにできることをする。”この想いが地域に根付いた当院の根幹です。今では標榜科29診療科、病床数594床の病院にまで発展することができました。

指定医療機関として、

- かかりつけ医を支援し地域医療の確保を図る「地域医療支援病院」、
- 専門的ながん医療の提供、地域のがん診療の連携協力体制の構築、がん患者に対する相談支援および情報提供を行う「地域がん診療拠点病院」、
- 母体又は児におけるリスクの高い妊娠に対する医療など周産期医療を行う「地域周産期母子医療センター」、
- 災害発生時に災害医療を行う地域の医療機関を支援する「災害拠点病院」、○重篤な救急患者を24時間体制で受け入れ高度な診療機能をもつ三次救急を担う「救命救急センター」

など、多くの認可を受け、西尾張地区の基幹病院としての役割を期待されています。

—— 今後の展望や抱負

病院の価値は、決して規模や設備で決まるものではありません。当院の基本理念に「地域の皆さんに愛され、信頼され期待に応える病院」とありますが、地域の皆さんが困った時には市民病院があると頼りにされてこそ、本当の意味での基幹病院の姿だと考えています。この基本理念を忘れることなく、地域から必要とされ信頼される病院であり続けたいと思っています。また、医療は社会インフラの一つですので、当院が信頼される基幹病院

として存在することが、地域医療の安定につながると考えています。

—— 卒業研修への取り組み

研修とはいえ、学生ではないので、教えてもらうのを待っているばかりでなく、スタッフの一人として積極的に現場の経験を積んでもらうことを第一に考えています。そんな中で、いろんなことを感じて欲しいと思います。悔しさ、悲しみ、喜び、その一つ一つが皆さんを育てると信じています。時には、失敗もするでしょう。失敗や過ちは歓迎するものではありませんが、残念ながら、人間ですから、避けては通れません。大事なのはその後です。研修医の諸君には、「たまたま、うっかりしてミスした」などと胡麻化さずに、自分の間違えや弱さを認める強さを身に付けてほしいと考えています。その強さがあれば、きちんと自分と向き合い、そこから成長へとつなげられる原動力になります。

—— 学生へのメッセージ

医者とは一人では何もできません。周りのスタッフの協力があって初めて仕事をすることができます。周囲のスタッフから支えてもらえる人間であって欲しいと思います。そのためには、周囲の人間をリスペクトできる人間になって欲しいと思いますし、周囲に対する感謝を忘れないで欲しいと思います。医学部は全員が医師になるような、特殊な環境、狭い世界です。出来れば、学生時代には一歩踏み出してみてもいいと思います。全く異なる様々な環境で多様な価値観に触れることは、多感な時期だからこそ、より意味あるものになるように感じます。



新院長 に 聞 く

常滑市民病院

の さき やす ひろ
野崎 裕広



—— 病院長就任にあたって

2018年に副院長として着任しましたが、新型コロナウイルス感染症への取り組みや半田病院との統合で、ただただ忙しく、呼吸器内科医として時が過ぎてしまいました。病院長とは、いままでの臨床家とは異なり、病院の社会的役割を考えながら病院経営者としての職責を果たす者である事を痛感しはじめています。

常滑市民病院の従来の歴史を引き継ぐだけではなく、医療ニーズの変化を見据えた病院機能の創成・ブランド化とそれに向けての職員のモチベーションを育むためにできることを考えながらの悩ましくも楽しい毎日です。

—— 病院の特徴と今後の展望

当院は、1959年に設立され、2015年には中部国際空港へ連絡するセントレアライン常滑インター直近の高台ニュータウンへ移転しています。病床数は266床で回復期リハビリテーション85床と特定感染症病棟2床を併設しています。一般総合病院としての一般急性期診療とともに、知多半島での最大級の腎透析センターによる包括的腎疾患診療、ロボット支援手術などを含めた包括的婦人科診療や顕微授精不妊治療診療といった特徴的な急性期診療も提供しています。リハビリテーション専門医管理下での専門的回復期診療、急性期から退院支援までの一貫した地域包括ケア診療も特徴的に行っています。特定感染症指定医療機関としては、未知の輸入感染症やエボラ出血熱は勿論ですが、新型コロナウイルス感染症では地域発生の新型コロナ診療はもとより、セントレア空港・名古屋港検疫のサポート医療機関としての診療と国際医療センターなどとの共同研究的役割を担っています。感染症専門医を迎え、知多半島エリアでの感染症診療ネットワークを生かして論文作成など積極的な情報発信も行っています。

2025年度からは近隣の半田市立半田病院との一法人化を予定しています。両病院のマニパワーを生かした働き方改革への対応と、特定感染症指定医療機関としての急性期機能や現存の特徴的急性期診療を機能分担しながら、知多半島中南部における地域医療包括ケアおよび回復期医療の中心的役割を担ってゆきます。また、呼吸器や循環器系などの慢性内臓疾患の良好な外来管理を目標とした内臓機能ハビリテーションセンターの創設や近年増加傾向にあるアレルギー疾患を包括的に診療できるアレルギーセンター外来開設なども近年中の目標としています。

—— 卒後研修への取り組み

当院は、大規模病院の多人数研修による護送船団方式研修ではなく、少人数制ならではの研修内容の個別化対応と主体的な担当医としてのかかわりができる実践的な研修を特徴としています。初期研修医受け入れは各学年4名です。一般的に不十分になりやすい感染症研修や地域包括ケア研修にも力を入れています。検疫所との連携下で輸入感染症診療、顕微授精不妊診療、慢性維持透析診療や、選択履修での離島研修のといった特徴的な研修を提供しています。2年先の半田病院との統合後も、当院での研修医採用は継続し、両病院のハイブリッド研修体制をプログラムに組み込み、初期研修から後期研修においてより多様な選択肢を設けた研修が可能となる予定です。画一研修ではなく自分に合った病院を探してみたいという方、地方病院ならではのあたたかな雰囲気のもと病院スタッフ全体で皆さんを歓迎します。

—— 学生さんへのメッセージ

医学部医学科卒業生はほぼ全員臨床医・研究者といった医療従事者になる上、名古屋大学の医学部は他学部とは立地も離れていることもあり、入学後2年目から卒業後は同業者ばかりの世界になります。大学在学中は同じ学生同士として、あるいは同じ年頃の友人同士として他の世界に進む友人・先輩・後輩と交友できる貴重な時間でもあります。また部活・サークル活動やアルバイトなどを通して様々な立場の人に出会えるチャンスもあります。医学は文字通り日進月歩で後に進む人ほど学ばなければならない知識も増えて、我々の学生時代より大変になっていると思いますが、この後の人生で得ることができない幅広い交友関係を大切に、様々な社会経験を積んで充実した学生生活をぜひ精一杯楽しんでください。





ポストン研究留学体験記

名古屋大学医学部附属病院 消化器内科

まえだ けいこ
前田 啓子



A Report of
Going abroad to Study

学友会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。消化器内科の前田啓子と申します。この度は海外留学について執筆の機会を賜り感謝申し上げます。

私は、大学院を卒業後2016年4月から2018年3月まで、アメリカのマサチューセッツ州ボストンにあるBoston Children's Hospital, Harvard Medical SchoolのWayne Lencer研究室に2年間研究留学をしました。研究留学を考えたきっかけは、腎臓内科医の夫が先にボストンで研究留学を行っていたことや、大学院生の時に、腫瘍病理学教室で基礎研究を学ぶ機会をいただき、もう少し研究を続けていきたいと考えたためです。大学院では、間葉系幹細胞の研究を行っていましたが、消化器内科医として帰国後も続けていくことができる消化管領域の研究を行っている研究室を探しました。いくつかの研究室にメールを送り、腫瘍病理学教室の先生方に推薦状を書いていただき、面接を経て、GI Cell biologyのLencer研究室への研究留学が決まりました。

Lencer研究室は、20年以上の歴史のある研究室で、上皮細胞の細胞内輸送や、コレラ毒素を中心とした病原体に対する腸管上皮細胞の感染防御機構の研究を行っています。研究室があるEnders Buildingは、同じフロアに感染症から腸管免疫、腫瘍と消化器領域の研究を行っているラボが複数あり、試薬を貸し合ったり、実験の相談をしたりと垣根がなく、とても恵まれた研究環境でした。週に1回、合同の研究発表会があり、消化器領域の様々な最先端の研究成果を聞くことができ、お互いに切磋琢磨しながら研究を進めることができました。PIの人柄や研究の進め方は、研究留学においてとても重要です。PIのWayneは、研究面ではとても厳しいですが、人柄は穏やかでみんなに慕われており、夏休みや新年にはラボメンバーを自宅に招待してホームパーティーを開いてくれました。また、的確な指導で、何人ものポスドクがPIとして独立しています。ポスドクは自分のプロジェクトを進めることが求められ、よく考えて実験をするという姿勢や自分の意見をしっかり言うという姿勢は学ぶことが多かったです。

私のプロジェクトは、前任のポスドクがsiRNAスクリーニングで同定した分子の細胞内輸送における機能解析でした。当初は、周りの英語も聞き取れず、大学院と異なる研究分野でもあったため、内容を理解するのにも時間がかかり、苦勞の連続でしたが、細胞内輸送だけではなく、上皮の感染防御にも関与するというこれまでの

概念とは異なる防御機構を示唆する結果が出て、思っていた以上の成果を出すことができました。

留学中の生活は、分化の違い、言葉の壁、子供の教育など苦勞はつきませんが、これまでいた日本での環境を客観的に見ることができます。多彩な人がいるので、お互いを比べず、違いを尊重する、穏やかに接する、どんなことでも楽しむということはこれまでの私にはなかったことで、とても勉強になりました。また、ボストンには日本人の研究者コミュニティがあり、同世代の異なる分野の研究者と知り合いになることができました。

2018年4月からは名古屋大学の消化器内科に戻ってきて、研究と臨床を行っています。留学中に行った研究が現在の研究の基盤となっており、Lencer教授やラボメンバーとは、今でも定期的にzoom meetingを行い、共同研究を行っています。2年間という短い期間の留学ではありましたが、斬新なアイデアや研究の進め方、また異なる分野の研究者との共同研究の仕方など多くのことを学ぶことができました。留学中は、生活面や英語も含めて苦勞することは多かったですが、何とか乗り越えることができたということも小さな自信につながっています。

末尾になりますが、この体験記が留学を考えている先生方の少しでも参考になれば幸いです。

